

## 三越刊行雑誌文芸作品目録

—— P R 誌「時好」「三越」の中の〈文学〉 ——

瀬 崎 圭 一

## 【解題】

合名会社三井呉服店、株式会社三越呉服店が明治期から刊行し始めた P R 誌は、山本武利<sup>①</sup>、初田亨<sup>②</sup>、神野由紀<sup>③</sup>、北山晴一<sup>④</sup>などの論者によつて様々な学問領域からその存在や意義について言及を重ねられてきた。〈日本文学〉研究もその例外ではなく、槌田満文<sup>⑤</sup>や紅野謙介<sup>⑥</sup>等がその存在について触れている。例えば前者は、三越呉服店が数度にわたつて募集した懸賞文芸作品について触れ、その当選者の中に後の著名な作家や知識人が含まれていたことを明らかにし、後者は P R 誌における小説掲載を「広告する小説」と位置付けている。

しかし、尾崎紅葉、森鷗外等著名な文学者が寄稿しているにも関わらず、その散逸し易い性格の故か P R 誌の全貌は未だ明らかでは

なく、全貌を見渡した上での体系的な分析もなされていない。本稿は、主要な三越刊行雑誌の書誌的事項やその特徴について触れ、掲載された文学テクストの全貌を「目録」という情報として整理することを目的としている。

※

三越の P R 誌は、明治三十二年一月、三越百貨店の前身三井呉服店が刊行した『花ごろも』に始まる。雑誌の版型は A 5 版、奥付によれば、明治三十二年二月二十九日印刷、明治三十二年一月一日発行、編輯兼発行者日比翁助、印刷者星野諤次郎、印刷所東京印刷株式会社、非売品であった。目次である「花衣目録」の後、見開きで三井呉服店の専属画師島崎柳塙による口絵「当世紳士并美人画小説むさう裏中の人物」があり、白峰・紅葉による小説「むさう裏」の重要性を物語る。口絵の後「発刊の辞」があり、三井呉服店本支店等写真、

商品広告の頁が続き、その後に本文が続くが、頁数が付されている本文は三一―一頁、その他に附録として「合名会社三井銀行案内」が七頁程付けられている。総頁数としては四五〇頁弱のかなり分厚い雑誌であった。以下はその際の編者（当時の三井呉服店支配人日比翁助と推測される）による「発刊の辞」である。

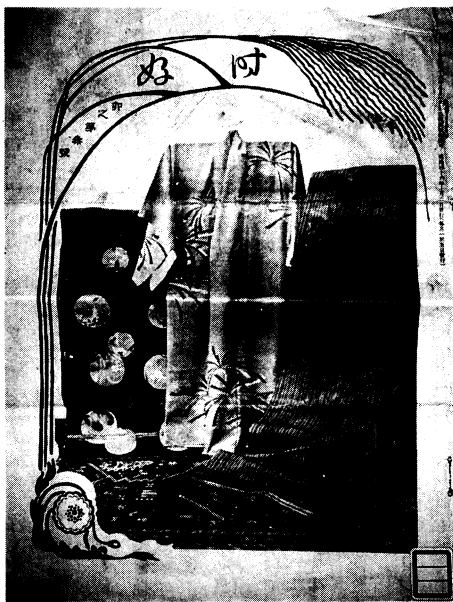
元禄宝永の昔、晋氏其角が「越後屋が絹裂く音や衣がへ」と口吟たる其越後屋も当今は三井呉服店と改まりて花の都の日本橋、富士を一目に駿河町、高き愛顧の御蔭にて昔も今も変らぬ繁昌、唯変り行くは世態にして汽船汽車四通発達北は北海道の端より西南は九州台湾扱ては海外諸国までも一片の郵便に注文を発し一個の小包に反物を送りて千里の遠きも坐ながら売買の出来る世の中とは為りぬ是に於て三井呉服店は広く愛顧の便利を謀り遠近共に所好の品を買ひ易からしめんが為め種々の新案を凝らすと同時に流行に先ちて流行を作り日新の勢に後れざる其有様を愛顧の方々に告げ知らせ其平生に酬ゆるの一端とも為さばやと思ひ此程より其材料を集めたりしが我田引水手前味噌にて商売の広告集ばかりと為りても妙ならずと扱ては世の大家先生を訪ふて呉服に縁ある論説考證又は小説の類を求めたるに何れも忙がはしき最中なれど余り思附の健気さに一筆走り書きして取らせんとて寄稿も直に集まりたれば遂に斯かる一冊子を為すに

至れりあはれ此一小冊子が我が愛顧の方々をして今の流行の有様を知り又当店の実やかなる働きを知らしむるの便とも為り又併せて春の日永の御伽草とも為りたらんには編者の本懐何ものか之れに過ぎん因て発刊の次第を述ぶると然り

この「発刊の辞」にあるように、『花ごろも』発刊の際の「世の大家先生を訪ふて呉服に縁ある論説考證又は小説の類を求めたる」、つまり白峰・紅葉の小説「むさう裏」掲載の試みが、以後の三越PR誌の戦略を覆うようになるのである。

『花ごろも』以後、明治三三年六月八日に『夏衣』、明治三三年一月一日に、『春模様』、明治三三年六月二日に『夏模様』、明治三四年一月一日に『水面鏡』、明治三六年一月二四日に『みやこぶり』と、およそ半年に一回のペースでPR誌は刊行されていくことになる。この内文芸記事が掲載されたのは『夏模様』、『水面鏡』で、いずれも『花ごろも』同様A5版、編輯兼発行者は日比翁助、非売品であり、雑誌構成も『花ごろも』と大差はない。この時期のPR誌の発行部数については「数万部」とされている。『夏模様』は本文九七頁、総頁数四一〇頁程、『水面鏡』は本文一四三頁、総頁数二〇〇頁強である。二誌とも『花ごろも』と比較すると、文芸記事に力を注ごうとする意図が読み取られ、『夏模様』に掲載された紅葉・鏡花「月下園」には雑誌内に色刷りの表紙を別に設けたり、

「時好」卯之第参号表紙



写真協力：三越資料室

に硯友社を起こした石橋思案のエッセイや、やはり紅葉に瞩目されていた蒲原有明の詩が掲載されていたりすること、あるいは「はいかい重筆筒」に小栗風葉、徳田秋声等紅葉門下の作家達や、秋声会を通じて紅葉と交流のあった滝川愚仏、角田竹冷等の俳人達が句を寄せているのもその結果であろう。

この紅葉を基軸にした文学者の集合は、三越PR誌が明治三十六年八月から月刊誌「時好」となつてからも継承される。「時好」以後は、当然紅葉の記事そのものを見ることは出来ないが（紅葉は明治三十六年一〇月に死去）、三越は、PR誌刊行開始の段階から大きな関わりを示した紅葉に対して、紅葉の十三回忌にあたる大正四年二月五日から八日までの間「紅葉山人遺品展覧会」を開催している。また、一連の三越PR誌の中で、紅葉を語る言説は何度も反復されていることが確認できる。この紅葉と三越との関係は「時好」に数多く掲載された硯友社系の作家達のテクストを根拠づけていると言えるだろう。

『氷面鏡』では、尾崎紅葉の序文「題氷面鏡」や、文芸関連記事を集めた「錦上百花」、紫明・紅葉の小説「黒袖」が掲載され、頁数を付された本文のほぼ半分を文芸関連記事が覆うことになる。それもその筈で、『氷面鏡』というタイトルは尾崎紅葉が考案したものであり、文芸記事の実質的編集者は尾崎紅葉であった。<sup>⑩</sup>

おそらく、服飾表現に拘泥する紅葉の語りに注目した三井呉服店が、『花ごろも』以後、さらに紅葉との関係を深めたものと考えられるが、初期の三越PR誌は、この紅葉との関係を基軸として（文芸）への接近を果たしていたと言える。『氷面鏡』に、紅葉と共

さて、明治三十六年八月から刊行された「時好」の概略を整理しておきたい。「時好」は、明治三十八年三月発行の巳之第参号までは、数字による巻数ではなく、その年の干支で巻数が表されており、一巻が「卯」、二巻が「辰」、三巻が「巳」にあたる。創刊号である卯之第壹号及び辰之第貳号を未見のため、確認した範囲の中の推

測を交えるが、創刊号から辰之第弐号までは、一〇頁程の薄いパンフレット状の冊子で、三段組で記事が編まれており、文学テキストや流行に関する記事の狭間に商品の写真が掲載されている。このパンフレット状の冊子が雑誌としての形態を持つようになるのは辰之第参号からであり、辰之第参号の本文冒頭には「本誌改良に就きて」という序文が掲載されている。辰之第参号からはA5版の雑誌となり、写真や商品広告の頁が雑誌巻頭を占め、その後本文が続くという構成になっている。これが「時好」の基本的構成として以後定着することとなる。編輯者、発行者は日比翁助、価格は一冊十二銭であった（後、編輯兼発行者は久保田米太郎、浜田四郎、笠原健一へと引き継がれ、価格も一冊十八銭へと値上げられる）。発行部数については先の「本誌改良に就きて」によれば「数万部」、三越社史「株式会社三越 85年の記録」（平成二・二・二五 株式会社三越）によれば一万六千部とある。「滑稽新聞」（一四三号 明治四〇・七・二〇）の「新聞雑誌の愛読者」を参照すると、「時好」は夫人の愛読する雑誌として風刺され、「女学世界」「文芸倶楽部」などと並列して紹介されており、もはや三越の顧客のみに配布される閉鎖的なPR誌ではなく、広く一般読者に開かれた商業誌としての機能を持っていたことが分かる。

前述したように、紅葉門下や小波門下等硯友社系の作家達やその

周辺の作家達のテキストは「時好」になってからも頻繁に掲載されるが、一方で「時好」になると紅葉や硯友社と比較的関わりの薄い作家達も筆を寄せるようになり、商業誌として誌面を充実させようとする傾向がうかがえる。第五卷第二号（明治四〇・二・一）には腰弁当というペンネームを用いた森鷗外の詩「三越」を掲載されているが、これは詩の掲載にあたっての序文で明らかにされているように、「趣味」（二卷一号 明治四〇・一・一）に掲載されたものを再録したものであり、言わば三越の広告的言説でなかった詩「三越」を、鷗外という商品価値に目をつけた三越側が（広告）として利用したと言えよう。鷗外と三越との関係は、明治四四年三月に刊行されたPR誌「三越」において深ま<sup>13</sup>っていく。

さらに「時好」は文芸作品を職業作家から得るだけではなく、「懸賞」という形で読者／消費者からも得ていた。既に「時好」（卯之四号 明治三六・一・一・五）の段階で「懸賞短篇小説募集」を行っていたが、より大々的に明治四〇年一〇月、賞金総額一千元をかけて三越をテーマとした懸賞文芸作品を募集しており、明治四一年一月（六卷一号）から五月（六卷五号）の「時好」には当選作品が掲載されている。この時は小説（広津柳浪・遅塚麗水選）だけでなく、脚本（伊原青々園・松居松葉選）、落語（岡鬼太郎選）、端唄（中内蝶二選）、小品文（武田桜桃選）、漢詩（大久保湘南選）、和歌

(佐々木信綱選)、俳句(巖谷小波選)、狂歌(黒田撫泉選)、川柳(井上剣花坊選)、情歌(石橋思案選)、新体詩(河井醉茗選)と、様々なジャンルを募集し、その選には流行会の関係者を中心とする錚々たるメンバーが当たった。応募数は俳句一六三三、川柳一二〇六、狂歌七三八、情歌六二九、和歌四三〇、漢詩八〇、小品文七八、新体詩六七、端唄五九、小説四七、落語三八、脚本一九、応募総数五〇一四であったという<sup>18</sup>。当選者の中には後職業作家としての道を歩む者も含まれており、例えば、脚本一等の川村花菱は、後に劇作家として活躍、脚本三等のふたつのは、当時新進劇作家として劇壇に登場した山崎紫紅のペンネーム、その他、小説一等の袖頭巾は本山荻舟であり、新体詩三等には長谷川春葉の名も見える。長谷川春葉は、長谷川春子の名で小品文三等にも入選している。

「時好」は明治四一年五月に刊行された第六巻第五号をもって終刊とされ、六月から継続誌「みつこしタイムス」(「三越タイムス」と表記される場合もある)が発刊された。「みつこしタイムス」は当初旬刊の雑誌として刊行され、旬刊の雑誌としては六月から九月まで計十二号刊行されている。第一号から第三号までは縦四四五ミリ、横三二〇ミリのかなりの大版で全頁数はいずれも八頁、編輯兼発行者は引き続き笠原健一、価格は五銭であった。創刊号に掲載された日比翁助「時好改題」によれば、「工芸の進歩と流行の潮勢は

年を経るに従ひ其速度を加へ、新陳代謝の結果朝に夕を囫られざるものあり。即ち当店の機関誌も亦此の日新の流潮に伴ひ其発行度数を増加して月三回と為し」たという。さらに「漸を以て改良發展を加へ、他日、日刊となすの地歩を作らんことを期す」とあり、日刊化の計画も明かされている。第四号より体裁が少し変化し、版型は縦三〇〇ミリ、横二二五ミリと縮小、その分頁数を十六頁と倍増させている。この間の文学関係の記事としては、遅塚麗水「当用日記」、武田桜桃「転変」が掲載されている。一〇月より「紙数薄く、且つは釘装の甘美を欠くの憾有之旁々江湖顧客諸彦より今少しく紙数を厚くし釘装更に一層の意匠を加へて保存の便を計りたき旨の御勧告荐りなるに其き御覧の如き体裁と改め」<sup>20</sup>、価格十八銭、B5版の雑誌として月刊化される。編輯兼発行者は引き続き笠原健一、発行部数は五万部と言われる。『株式会社三越 85年の記録』によれば、明治四一年一〇月より「みつこしタイムス」を日刊とし、来客に配布」とあり、この時期「みつこしタイムス」は日刊のものと同刊のものが刊行されていたようであるが、日刊化された「みつこしタイムス」については不詳である。当初は僅かながらも文学関係の記事を掲載していた「みつこしタイムス」も商品広告が頁を占めるようになり、この事態に対して新しいPR誌「三越」が刊行される運びとなる。「みつこしタイムス」は大正三年五月に「三越」に

併合されるまで「三越」と平行して刊行されることになり、記事の重複も見られる。なお、第八巻第四号（明治四三年四月一日発行）より「みつこしタイムス」は非売品となり、無料贈呈の形をとることとなる。

さて、新たに「三越」が刊行されることになるのだが、創刊にあたって創刊号（明治四四年三月一日発行）に以下のような辞が掲載されている。

新たに『三越』を發刊するについて

三越呉服店專務取締役 日比翁助

『学俗協同』は余が処世の第一綱領なり。三越呉服店を經營するに方りても、徒らに利是れ争ふを以て能事となす能はず、一代の好尚を高め、当世の風潮を清らかにし、以て聊か社会に貢獻せんは、余が夙昔の願ひなり。余は常に諸科の学問に精しく文芸美術に秀づる碩学天才の援けによりて、此素願を成さん力をめたり。

余が十年の昔、雑誌『時好』を發刊したる亦此意に外ならず。学者の卓説を誌上に掲げて、俗人の余之を實際に行ふ、店運の發展に遵ひて、雑誌の体裁を變じ、其名題を代たる事一再にして止らざりしも、尚夙昔の素願は決して渝はる事なく、『学俗協同』の精神は、曾て余が頭腦を去りたる事莫し。しかも憾む

らくは、わが販売部の進歩發展余りに急速にして、他のあらゆる部面を犠牲にするに非れば、其進歩に伴ふ能はず、わが『三越タイムス』の如きすら、往々にして販売部の広告機関たるに止まらんとしたり。是れ実に『学俗協同』の宿論に相反するもの、余の長く耐ゆる處に非ず、即ちこゝに別に『三越』を新刊し、屢ば従來の『三越タイムス』に欠けんとしたる『学俗協同』の事に中らしめんとす。

今や編輯部の機関漸く整ひ、一代の碩学天才喜んで当店の事業を援くるの人尠なからず、諸家の名篇卓説は常に『三越』誌上に絶ゆるなからん。洵に是れ太平の壯觀、文華の楽園なり、余は夙昔の理想が次第に円満に近づきつゝ、あるを喜ぶ。

この日比翁助の辞は、三越の広告的戰略を（学俗協同）という理念にすりかえ、その商業的な欲望を隠蔽しようとしていると言えよう。企業の名をそのまま誌名にした「三越」に至つて、（文学）を利用した広告法はますます拡張していき、大衆消費社会が芽生えた明治末期から大正初期にかけてその活動はピークに達する。

「三越」は関東大震災直後に刊行された第十四巻第一号の復興号（大正一三・二一）を除いては全てB5版の雑誌で、「時好」同様、商品広告と本文記事により構成されているが、第五巻第四号（大正四・四・一）の「三越」までは、文芸関連記事は「文芸欄」もしく

は「文芸」という扉のもとに編集されている。明治四四年三月に刊行された第一巻第一号から昭和八年四月発行の第二十三巻第二号までを確認できる。大正一二年九月一日の関東大震災は三越本店を全焼させ、故に「三越」もしばらく休刊されるが、先に挙げた第十四巻第一号の復興号、第十四巻第九号（大正一三・一一・一）を挟んで大正一三年一二月に第十四巻第十号の十二月復活号が刊行されている（しかし、第十四巻第一号から第九号に号数が飛躍しているのは不自然であり、第二号から第八号までが刊行されている可能性がある）。

価格については、第一巻第一号から第一巻第四号（明治四四・六・一）までは非売品、第一巻第五号（明治四四・七・一）からは一冊二十五銭で販売される。以後、第十一巻第一号（大正一〇・一・一）からは三十銭、第十五巻第六号（大正一四・六・一）から二十銭、第二十三巻第二号（昭和八・四・一）に至って十五銭に改定される。編輯兼発行者は、創刊号から第九巻第八号（大正八・八・一）までは引き続き笠原健一、第九巻第九号（大正八・九・一）より黒田朋信、第十四巻第十号（大正一三・一一・一）の十二月復活号より須藤莊一が担当している。発行部数は「みつこしタイムス」同様、五万部とある。

「三越」に掲載された文学テキストは「時好」のそれとはやや異

なつた様相を呈していると言えるだろう。「時好」は紅葉門下、小波門下等硯友社系の作家達で占められていたが、「三越」では駿河町人（松居松葉<sup>25</sup>）、巖谷小波、泉鏡花の活動を除いては硯友社系や硯友社周辺の作家によるテキストは見られない。明治三八年六月に流行会が結成されて以来、三越をサポートしてきた文化人、知識人が、「三越」刊行時になると非常に明確に規定されてくることの一つの要因であろう。「三越」の文芸欄に掲載された文学テキストはほとんど流行会の会員によるものである。例えば、森鷗外、塚原洪柿園、松居松葉、饗庭篁村等は皆流行会の会員であり、創作を発表する傍らで、流行会での講演をそのまま文字化して掲載しているものも数多い。松居松葉に至っては、ほぼ毎号のように講演、随筆、戯曲等を発表していることも分かる。美術史家の斎藤隆三、児童心理学者の高島平三郎、人類学者の坪井正五郎、医学博士で歌人、国文学者でもある井上通泰や新渡戸稲造等も流行会会員で、三越は現象としてのモードを多方面から捉えようとしていたことが分かる。森鷗外のテキストとしては「さへぶり」「流行」「田楽豆腐」「女がた」があるが、「三越」の創刊号の文芸欄冒頭に鷗外の「さへぶり」を掲載したことは、やはり三越側が商品としての鷗外の名前を強く意識した表れであろう。鷗外夫人しげの作も「チチエロオネ」「岸」「お鯉さん」と三作、鷗外の妹小金井喜美子は「旅婦、未

子の病、骨牌会「紅入友染」と二作あるが、これは鷗外を通じて「三越」という発表舞台を得たものと推測される。森しげや小金井喜美子、与謝野晶子、国木田治子、長谷川時雨、岡田八千代、田村とし子等女性作家の活動が目立つのも「時好」とは異なる点で、これは家庭の主婦という読者層を見越した上での起用であろう。

「時好」が懸賞文芸作品を募集したように、大正二年八月、「三越」でも同様に懸賞文芸作品を募集する。前述したように、明治四〇年、「時好」誌上で募集した際は、賞金総額一千元、十二種の文芸作品であったが、この「三越」(三巻九号 大正二・九・一)の募集は賞金総額三千元、脚本(伊原青々園・伊坂梅雪・岡本綺堂・松居松葉・饗庭篁邨選)、小説(塚原洪柿園・幸田露伴・森鷗外選)、論文(高島平三郎・樺山健堂・角田浩々・斎藤隆三・菅原教造選)、写生文(遅塚麗水・武田鷲塘・神谷鶴伴・永島永州選)、狂言(巖谷小波・黒田撫泉選)、御伽脚本(巖谷小波・松居松葉選)、御伽噺(巖谷小波・武田鷲塘選)、長唄・常盤津・清元(中内蝶二・半井桃水選)、唱歌(佐々醒雪・東儀鉄笛選)、落語(岡鬼太郎・井上与十選)、一口噺(岡鬼太郎・前田曙山選)、端唄(中内蝶二・半井桃水選)、和歌(井上通泰選)、俳句(佐々醒雪選)、川柳(井上剣花坊選)、狂詩(堀紫山選)、狂歌(黒田撫泉選)、情歌(石橋忠案選)、表紙図案(塚本靖・黒田清輝・邨田丹陵・久保田米斎・正木直彦

選)、写生画(黒田清輝・邨田丹陵・永井鳳仙・久保田米斎選)と、ジャンルも二十種に渡った。選者は前回同様流行会会員が中心になっている。題材はやはり「多少三越呉服店と交渉あるもの」で、募集広告は「是れ単に三越呉服店の光榮たるに止まらず、実は大正文壇の盛観たらん」とうたい、「当選中の佳作は「文芸の三越」の名を以て単行本として出版」することも予告された。応募数は、脚本一六七、小説二四七、論文九八、写生文四二、御伽脚本五二、御伽噺一五六、狂言三一、長唄・常盤津・清元一〇四、唱歌一六五、落語一一九、一口噺二三六九、端唄七七一、和歌三二二三、俳句一〇九七二、川柳八九四三、狂詩三二二、狂歌四〇三四、情歌三六五四、表紙図案六九四、写生画一五三であった(他に規則違反として三九八)。

この募集に關しても選者の鷗外の存在は大きくクローズアップされ、「殊に森鷗外博士の如きは、時しも病氣のために御役所さへ退いて居られたに拘らず、尚他の選者諸先生と共に慎密な選定の勞を取られた事は、応募者諸君に於ても、十分に感謝せらる、価値のあることだらうと信じます」と語られている。

当選発表は「三越」(三巻十二号 大正二・一二・一)誌上で行われ、大正二年二月八日夜、流行会納会と共に、都下在住の第一等当選者を集め、選者との食事会も催された。「時好」の懸賞文芸



作品募集の際と同様に、やはり当選者の中には後に文壇、学会、論壇で活躍するような人物も含まれていた。植田満文<sup>③</sup>の指摘によれば、小説第一等「赤い花」の松村みね子は、当時佐々木信綱門下で、後にアイルランド戯曲の翻訳で知られた歌人片山広子の別名、当選した大正二年の時点で既にミラー「自然の美」の翻訳を発表したり、竹柏会の歌文集「竹柏園集」等に多くの歌文を掲載していた。また、脚本第三等「当世娘気質二八、一七」のXYZは山本有三の匿名、論文第二等「流行の将来」の高松の菊池寛一郎とは菊池寛のことで、当時京大英文科在学中、様々な懸賞に応募して賞金を稼いでいたという。御伽脚本第一等「囚はれ乙女」の杜口なぎさは、後の美術評論家森口多里、第二等「呉服祭」の額田六福は後「冬木心中」で知られる劇作家、御伽噺第三等「あこがれの国」の川添利基は、後小説家、劇作家、演出家として活躍、川柳第一等吉川独活居は後の吉川英治であった。

予告通り第一等の作品は集められて大正三年一月一〇日、「文芸の三越」として刊行、「三越」の売捌所であった東京の東海堂、京都の芸艸堂<sup>④</sup>や東京、大阪の三越でも販売された。編輯兼発行者は川口陟。版型は四六版、表紙は表紙図案一等の小林専のデザイン、定価三十五銭の単行本だった。巻頭に一等当選者と流行会会員の写真があり、その後、緒言一八頁、本文二五四頁と続く。「三越」は

『花ごろも』刊行時と同様に『文芸の三越』の反響を調査し、「兎に角懸賞文芸としては種類の多いのが破天荒で、それ／＼にそれ／＼の趣きと味ひがある」（「中外商業新報」大正三・一・一七）といった記事をそのまま「三越」に掲載して紹介している。「大正文壇の盛観」は大袈裟な言い回しであるが、確かにこの『文芸の三越』には、菊池寛など、後の文壇を支える作家たちが当選していたことも確かである。三越の〈文学〉を利用した広告戦略はこの『文芸の三越』刊行をもって最高潮に達すると言えよう。

大正三年に『文芸の三越』を刊行して以後の「三越」の誌面からは徐々に文学テキストが見えなくなり、大正四年三月発行の第五巻第三号に掲載された遅塚麗水の講演「曲阜と泰山」を最後に、創刊以来維持していた「文芸欄」が誌面から姿を消すことになる。再び文芸記事が掲載されるようになるのは大正一三年以降となるが、そこに掲載されたものは子供向けの童話、童謡や随筆、小品がほとんどであり、「時好」や大正四年までの「三越」に頻出していた広告としての〈文学〉、つまり三越や衣服、モードをめぐるテキストは姿を消していく。様々な広告メディアが成熟、氾濫する中で、広告としての〈文学〉はその役目を終えたと言えるだろう。

※

以上、主な三越刊行雑誌の概要を記してきたが、前述したように、

記述はあえて書誌的事項、事象の羅列を中心に据えた。PR誌のテクスト分析等に関しては別稿に譲りたい。また、以上の記述は「目錄」に記した確認範囲に限定した上での記述であることを断つておく。三越はここに紹介したPR誌の他にも「大阪の三越」（明治四三年三月創刊）、「三越週報」（明治四四年三月創刊）、「三越カタログ」（大正一三年二月創刊）等を刊行しているが、それらについては全く未確認である。

後に挙げる「目錄」は、小説、詩等の創作を中心に作成しているため、随筆や小品、身辺雑記、座談会の類は全て省略している。目錄として挙げるができなかった記事の中にも興味深いものや大きな問題を孕んでいるものもあり、いずれそれらを含めた総目錄としてその全貌を整理したい。

最後に、貴重な資料を快く提供して下さった三越資料室の松澤氏に深く御礼申し上げたい。

## 注

- ① 山本武利『広告の社会史』（昭和五九・一二・三〇 法政大学出版社）
- ② 初田亨『百貨店の誕生』（平成五・一二・五 三省堂）
- ③ 神野由紀『趣味の誕生 百貨店がつくったテイスト』（平成六・四・一〇 勁草書房）
- ④ 北山晴一『衣服は肉体になにを与えたか 現代モードの社会学』（平

成一・七・二五 朝日選書）

⑤ 槌田満文『文学に見る広告風物誌』（昭和五三・一一・五 プレジデント社）

⑥ 有山輝雄・高橋世織・十川信介・宮崎俊彦・紅野謙介（司会）『座談会』出版文化と近代文学（『文学』九卷一号 平成一〇・一・二二）

⑦ 『花ごろも』に対しては「製本の美麗なる挿画の精巧なる紙質の善良なる更に遺憾なし」（報知新聞）、「美麗鮮明美に近時稀に見る所の好冊子にして洵に花ごろもの名に背かず」（文芸倶楽部）といった評価がされ、『夏衣』でそれらの批評文が紹介されている（引用も『夏衣』による）。

⑧ 三越PR誌における消費と（文学）との関係については別稿を期したい。

⑨ 『夏模様』に紹介された「日出新聞」（明治三三・一二・一七）の金子静枝の批評記事による。

⑩ 巖谷小波『紅葉山人と流行』（『三越』五卷十二号 大正四・一二・一）参照。「水面鏡」という雑誌タイトルをめぐって日比翁助との意見の食い違いがあったという。

⑪ 伊狩亨『後期硯友社文学の研究』（昭和三二・一二・二五 矢島書房）参照。

⑫ 高木蒼梧『秋声会・筑波会などの人々』（『俳句講座』8 現代作家論〈昭和三三・一二・二五 明治書院〉）参照。

⑬ 例えば、『時好』（五卷一号 明治四〇・一・一）には篠田こてふ「紅葉好みの婦人衣装（小説中に書ける衣裳髪飾）」として、「不言不語」の笠原夫人、「多情多恨」の葉山夫人、「金色夜叉」の富山夫人、「金色夜叉」の満枝、「隣の女」のお小夜と、それぞれのテクストの女性作中人物の衣服を紹介しているし、桜桃子（武田桜桃）「故紅葉先生と我三越（十千万堂日録を読む）」（「みつこしタイムス」一二月の巻 明治

- 四一・一二・一)では、紅葉の日記「十千万日録」に「三井呉服店」(三越)の名がたびたび現れることを指摘することとその関係の深さを語り、「紅葉山人遺品展覧会」の記事を紹介した「三越」(五巻十二号大正四・一二・一)には巖谷小波の「紅葉山人と流行」という講演が文字化されてもいる。昭和四年の紅葉二七回忌においても三越は一月三〇日から二月五日まで記念展覧会を開催し、その時期のPR誌には、巖谷小波「紅葉と衣食住」、江見水蔭「紅葉の偽筆」(三越)十九巻十一号 昭和四・一一・一)といった記事が掲載されている。
- ⑭ この点に関しては、山崎国紀「流行」及び「さへづり」の周辺——鷗外と「三越」の関係——(森鷗外研究)3 平成元・一二・三)に詳しい。
- ⑮ この時の募集要項の一つは「衣裳に縁故あるものを以て主題となすべし(仮令ば小袖、頭巾、帯、羽織、襦袢、其他此れに類似のものを材料に採るべし)」というものであり、賞金は一等金五十円、二等金二十五円、三等金十円であった。
- ⑯ 【株式会社三越 85年の記録】他参照。
- ⑰ 正式名称は流行研究会で、明治三八年六月に結成され、関東大震災時まで活動。この会に関わった文学者には、例えば、巖谷小波、石橋思案ら硯友社系の作家達や遅塚麗水、松居松葉、井上剣花坊、岡鬼太郎、伊坂梅雪、後には、塚原洪柿園、半井桃水、前田曙山、新渡戸稲造、森鷗外、饗庭篁村、内田魯庵等が加わる。三越は、流行会で行われる流行、社会風俗の傾向などの研究討議を通じて、彼等のアドバイスを待っていた。流行会の動向については、神野由紀「第3章「趣味」の啓蒙——流行会について」(「趣味の誕生 百貨店がつくったテイスト」)に詳しい。
- ⑱ 庸寧子「懸賞美文学の当選に就きて」(「時好」六巻一号 明治四一・一・一)参照。
- ⑲ 樋田満文「文学に見る広告風物誌」参照。
- ⑳ みつこスタイルス編輯部「謹告」(「みつこスタイルス」一〇月の巻 明治四一・一〇・二五)
- ㉑ 「三越」と「みつこスタイルス」とは斯して作られた、あり「三越」一巻六号 明治四四・八・一)、及び「株式会社三越 85年の記録」参照。
- ㉒ 【株式会社三越 85年の記録】参照。
- ㉓ 第十四巻第一号の復興号は縦三七〇ミリ、横二六五ミリのタブロイド版の薄い冊子であった。
- ㉔ 第十四巻第一号(大正一三・二・一)の復興号に掲載された鵬心生「三越」と流行」によれば、大正一三年九月発行予定の「三越」は震災のため全て製本中に焼失したという。
- ㉕ 注⑲)と同じ。
- ㉖ 戸板康二「演芸面報 人物誌」(昭和四五・一・二五 青蛙房)の「松居松葉」の項参照。
- ㉗ 【株式会社三越 85年の記録】他参照。
- ㉘ 「三越」(三巻十一号 大正二・一一・一)参照。
- ㉙ 「文芸の三越」(大正三・一・一〇 三越呉服店)
- ㉚ 樋田満文「文学に見る広告風物誌」参照。
- ㉛ 東海堂、芸艸堂は「時好」以来の三越PR誌の大売捌所であった。
- ㉜ 「三越」(四巻二号 大正三・二・一)

※ 本稿脱稿後、山本武利、西沢保編『百貨店の文化史——日本の消費革命』(平成一一・一二・三 世界思想社)が刊行された。同書中の土屋礼子「第9章 百貨店発行の機関雑誌」、「資料2 百貨店発行の逐次刊行物リスト」は本稿が確認できなかったいくつかの書誌的事項を明らかにしている。

## 【目録】

凡例

一、本目録は合名会社三井呉服店、株式会社三越呉服店刊行の一連のPR誌に掲載された文芸作品の目録で、三越資料室、国立国会図書館、東京大学附属図書館（総合図書館及び社会情報研究所図書室）、神戸大学人文社会科学系図書館に所蔵されているPR誌をもとに作成した。よって三越資料室、国立国会図書館、東京大学附属図書館、神戸大学人文社会科学系図書館に所蔵されていない巻号の雑誌については未確認であることを断っておく。確認した範囲は以下に示す通りである（「時好」、「三越」については発行年月日を省略）。

- 『花ごろも』（明治三二年一月一日発行）
  - 『夏衣』（明治三二年六月八日発行）
  - 『春模様』（明治三三年一月一日発行）
  - 『夏模様』（明治三三年六月二日発行）
  - 『水面鏡』（明治三四年一月一日発行）
  - 『みやこぶり』（明治三六年一月二四日発行）
  - 『時好』
- 卯之第式号から第四号まで  
辰之第老号、同第参号から第十二号まで

巳之第老号から第三卷第九号まで、同第十一号から第十三号まで

- 第四卷第一号から第十五号まで
- 第五卷第一号から第三号まで、同第五号から第十五号まで
- 第六卷第一号から第五号まで
- 「みつこしタイムス」
- 第一号から第十二号まで、十月の巻から十二月の巻まで（明治四一年刊行）
- 第七卷第一号から第四号まで、同第六号から第七号まで、同第九号から第十三号まで（明治四二年刊行）
- 第八卷第一号から第五号まで、同第七号、同第九号から第十三号まで（明治四三年刊行）
- 第九卷第一号から第九号まで、同第十一号から第十二号まで（明治四四年刊行）
- 「三越」
- （第一卷第一号から第十一号まで
- 第二卷第一号から第十三号まで
- 第三卷第一号から第十二号まで
- 第四卷第一号から第十二号まで

- 第五卷第一号から第十二号まで
- 第六卷第一号から第十二号まで
- 第七卷第一号から第十二号まで
- 第八卷第一号から第十二号まで
- 第九卷第二号から第十二号まで
- 第十卷第一号から第四号まで、同第六号から第十二号まで
- 第十一卷第一号から第二二号まで、及び増築記念号（大正一〇年七月二〇日発行）
- 第十二卷第一号から第十二号まで
- 第十三卷第一号から第八号まで
- 第十四卷第一号、第九号、第十号
- 第十五卷第一号から第十二号まで
- 第十六卷第一号から第十二号まで
- 第十七卷第一号から第十三号まで
- 第十八卷第一号から第十二号まで
- 第十九卷第一号から第十二号まで
- 第二十卷第一号から第十一号まで
- 第二十一卷第一号から第十一号まで
- 第二十二卷第一号から第十一号まで（第十二号は休刊）
- 第二十三卷第一号から第二号まで

○『文芸の三越』（大正三年一月一〇日発行）

一、『氷面鏡』の文芸作品については「錦上百花」（七七―一一八頁）内に掲載されているものは全て挙げた。

一、「時好」については、随筆、小品等は省略し、小説、詩等創作を中心に挙げた。韻文については、一人の作者でタイトルをもっている場合のみ挙げた。ただし、明治四〇年一〇月に募集され、明治四一年刊行の同誌に掲載された懸賞当選作品については全てを挙げた。

一、「みつこしタイムス」については、旬刊、月刊のみを対象とし、明治四一年一〇月から来客に配布されたと言われる日刊のものについては未確認のため、本目録の対象からは除外した。「時好」同様に、随筆の類は省略し、小説、詩等の創作を中心に挙げた。

一、「三越」についてはジャンルを特定せず、「文芸欄」（もしくは「文芸」）に掲載されたものを全て挙げた。また、懸賞「文芸の三越」の当選作で誌上に掲載されたものも挙げた。「文芸欄」が誌面から消えた第五卷第四号（大正四年四月）以降は職業作家による小説、詩等の創作を中心に挙げ、随筆、小品、座談会の類や読者が投稿したものは省略した。韻文の場合は一人の作者でタイトルを持っている場合のみ挙げた。

一、『文芸の三越』については、総目録を挙げた。一口噺、端唄、

和歌、俳句、川柳、狂歌、情歌に關しては作者名だけを挙げ、掲載順に列挙した。なお、名前の重複は複数に投稿していることを示す。

一、作者名は雑誌の表記のものを初めに記し、雅号、ペンネームについては、判明した場合のみ現在一般に流通する作者名を括弧内に記した。

一、作品名については、原則として雑誌の表記に従った。作品名の鍵括弧内にそのジャンル名を示したものがあがるが、それも雑誌の表記に従った結果である。

一、原則として旧漢字は新漢字に改めた。

○『花ごろも』（明治三二年一月一日発行）

白峰・紅葉（中山白峰・尾崎紅葉）「むさう裏」（雑誌二七四）  
二七五頁間に三五頁掲載）

○『夏模様』（明治三三年六月二日発行）

紅葉山人（尾崎紅葉）（俳句）（目次後に掲載）  
紅葉・鏡花（尾崎紅葉・泉鏡花）「月下園」（七八〜七九頁間に  
三二二頁掲載）

○『氷面鏡』（明治三四年一月一日発行）

十千万堂紅葉（尾崎紅葉）「題氷面鏡辭」（巻頭に掲載）  
榛園のあるじ「植物模様」（七七〜八五頁）

蒲原有明「新譜」（八五〜八九頁）

思案外史（石橋思案）「始て蚕を養ふ記」（九〇〜九六頁）

築下老（尾崎紅葉）「去年の夢」（九七〜一〇七頁）

京の藁兵衛「小袖もやう」（一〇八〜一〇九頁）

麦人（星野麦人）・鏡花（泉鏡花）・西男（田村西男）・活東

（谷活東）・柴兮・霞山・大羽（小峰大羽）・紅葉（尾崎紅葉）・

風葉（小栗風葉）・酒石・しづく・秋声（徳田秋声）・南岳（太

田南岳）・黄雨（川村黄雨）・我堂・冬湖・愚仏（滝川愚仏）・

翠美・斜汀（泉斜汀）・愛人・苔花（鈴木苔花）・翠華・竹冷

（角田竹冷）・無黄（森無黄）・紫明（藤井紫明）「はいかい重筆

筈」（一一一〜一一八頁）

紫明・紅葉（藤井紫明・尾崎紅葉）「黒袖」（一一九〜一四三  
頁）

○「時好」

【卯之第四号（明治三六年一月五日発行）】  
葉子「見あひ」（五頁下段〜七頁下段）

【辰之第壹号（明治三十七年一月一日発行）】

広津柳浪「因縁」（六頁下段〜八頁下段）

※ 辰之第貳号は未見だが、前後の情報から広津柳浪「因縁」  
 (一)が掲載されているものと推測される。

【辰之第參号（明治三十七年三月六日発行）】

広津柳浪「因縁」(三)(三)〜(八頁)

金扇子「袴」(懸賞小説第貳等)(九〜一五頁)

小波(巖谷小波)「春一ダース」(二六頁)

【辰之第四号（明治三十七年四月一日発行）】

小栗風葉「男浪女浪」(一〜七頁)

左袒「御高祖頭巾」(懸賞小説第參等)(八〜一一頁)

月下村人「た、り小袖」(懸賞小説第參等)(二二〜二七頁)

二牛生「お高祖頭巾」(懸賞小説第參等)(二八〜三三頁)

佐々木信綱「春の歌十二首」(三四頁)

水落露石「萌ゆる草」(三五頁)

【辰之第五号（明治三十七年五月一日発行）】

塚原蓼洲(塚原洪柿園)「子ゆゑ」(一〜四)(二二〜二五頁)

泉鏡花「千鳥川」(二六〜三六頁)

【辰之第六号（明治三十七年六月一日発行）】

塚原蓼洲(塚原洪柿園)「子ゆゑ」(五〜七)(二二〜二五頁)

徳田秋声「おとゝひ」(二六〜三四頁)

【辰之卷七号（明治三十七年七月一日発行）】

塚原蓼洲(塚原洪柿園)「子ゆゑ」(八〜十二)(二二〜三二頁)

三宅青軒「従軍画家」(三二〜四〇頁)

水車山人「いちご会」(四一頁上段〜四六頁上段)

【辰之第八号（明治三十七年八月一日発行）】

遅塚麗水「軍人の妻」(二二〜二四頁)

山岸荷葉「定紋崩」(二五〜三八頁)

紅人「夕顔棚」(四六〜四九頁)

金子薫園「紅詩箋」(五八頁上段)

【辰之第九号（明治三十七年九月一日発行）】

小波(巖谷小波)稿 笑劇「化の皮」(八〜二七頁)

生田葵山人「絹手巾」(二八〜三九頁)

【辰之第十号（明治三十七年一〇月二日発行）】

柳川春葉「秋日和」(一七〜四〇頁)

谷活東「待宵」(四一〜四八頁)

【辰之第十一号（明治三十七年十一月八日発行）】

宙外(後藤宙外)「夢か」(九〜二八頁)

北島春石「わかれ路」(二九〜三五頁)

真如女史「裏おもて」(三六頁上段〜四四頁上段)

【辰之第十二号（明治三十七年二月二日発行）】

北里龍堂 喜劇「やぶにらみ」（一―二二頁）

黒田湖山「玉」（二二―二九頁）

【巳之第七号（明治三十八年一月一日発行）】

幸堂得知 喜劇「さんすくみ」（一―二七頁）

瀬戸半眠「良縁」（二八―四九頁）

水車山人「新婚旅行」（五一頁上段―五六頁上段）

【巳之第七号（明治三十八年二月一日発行）】

ツルゲーネフ作・柳川春葉訳「車輪の響」（一―二四頁）

千葉紫草「黄蝶白蝶」（二五―三七頁）

【巳之第七号（明治三十八年三月一日発行）】

小山内八千代「門の草」（一―六五頁）

【第三卷第四号（明治三十八年四月一日発行）】

巖谷小波 笑劇「臆病娘」（四五―五四頁）

【第三卷第五号（明治三十八年五月一日発行）】

魯庵生（内田魯庵）「指輪」（三五頁上段―五四頁上段）

【第三卷第六号（明治三十八年六月一日発行）】

松葉（松居松葉）ほんあん 神話喜劇「元禄姿」（三二頁上段  
―五〇頁上段）

【第三卷第七号（明治三十八年七月一日発行）】

柳浪（広津柳浪）「白薔薇」（五一―五六頁）

【第三卷第八号（明治三十八年八月一日発行）】

思案外史（石橋思案）「失恋長家（小説）」（四五―五六頁）

【第三卷第九号（明治三十八年九月一日発行）】

川上眉山「爪木折（小説）」（四二―五六頁）

【第三卷第十三号（明治三十八年二月一日発行）】

福田琴月 喜劇「お荷物日」（三〇―四二頁）

【第四卷第三号（明治三十九年三月一日発行）】

山里水葉「妻と弟（小説）」（二一―一七頁）

【第四卷第六号（明治三十九年五月三〇日発行）】

江見水蔭・万代花舟「兄と弟（小説）」（二五―二〇頁）

【第四卷第十号（明治三十九年八月一日発行）】

篠山吟葉 お伽噺「蛇いちご（お伽噺）」（五―三三頁）

【第四卷第十一号（明治三十九年九月一日発行）】

無名氏稿「妹の功名」（一四頁下段―二四頁下段）

【第四卷第十五号（明治三十九年十二月一日発行）】

山岸荷葉「大景物」（六頁下段―一六頁上段）

【第五卷第一号（明治四〇年一月一日発行）】

巖谷小波「解語の松」（二頁上段―六頁上段）

【第五卷第二号（明治四〇年二月一日発行）】



腰弁当(森鷗外)「三越」(一頁)

【第五卷第三号(明治四〇年三月一日発行)】

前田林外「もはや三越絹布店」(一頁)

【第五卷第六号(明治四〇年五月一日発行)】

河井醉茗「三越の歌」(二頁)

【第五卷第九号(明治四〇年七月二十五日発行)】

田口掬汀「衡木門(小説)」(一一―一二頁)

【第五卷第十号(明治四〇年八月二十五日発行)】

武田桜桃「虚栄心」(二二―三三頁)

【第五卷第十三号(明治四〇年一〇月二十五日発行)】

思案外史(石橋思案) 滑稽小説「自然派」(二〇―二六頁)

【第五卷第十五号(明治四〇年二月二十五日発行)】

斎藤弔花 小説「梅園伯爵夫人」(二一―二九頁)

【第六卷第一号(明治四一年一月一日発行)】

川村花菱 喜劇「自然主義」(脚本志等)、伊原青々園、松居松

葉評(一―三二頁)

袖頭巾(本山秋舟)「橋姫」(小説志等)、遅塚麗水評(二三―

三〇頁)

艶次郎「帯」(落語志等)、岡鬼太郎評(三二―三七頁)

塙呉内(はうた志等)、石原、山、霞蝶園主人(同式等)、稚井

者成、石原、山、星初月(同參等)、中内蝶二評(三八―三九頁)

花簀似六郎「画趣」(小品文志等)、中塚銀波「八つの窓」、宇

佐美かず子「見たるがま」、(同式等)、河原松太郎「三越呉

服店前」、長谷川春子(長谷川春葉)「磯千鳥」、小米花「石像」

(同參等)、武田鷲塘評(四〇―四三頁)

長沢松雨「寄三越呉服店」(漢詩一等)、大久保霸山「詠三越商

店」、中村榴亭「寄三越呉服店」(同二等)、小倉二葉「三越呉

服店所見」、近藤暖村「題商舖三越」、畑野春波「三越商店即

目」(同三等)、服部槐陰「觀三越陳列場」、安部鳴鳳「觀三越

呉服店陳列会」、芝山如醉「三越」、勝南生「三越」、中村古洲

「三越」、浅田喜代子「題時好寄三越呉服店」、橋本水哉「觀三

越呉服店陳列会」、小熊竹園「寄題三越」、鈴木琴峰「寄題三

越」、工藤龍橋「寄三越呉服店」、(それぞれに大久保湘南の評

有)(四四―四五頁)

高橋刀畔、小林八千代、中村剛健、岡田次郎、間宮閑遊、小川

丑之助、柏原美奈子、杉下ふみを、古川孤濤、島津清之(和歌

四等)、村田霞仙、桑田徳子、久世東籬(同三等)、原輝、桜井

直太郎(同二等)、菊池秋菊(同一等)、佐々木信綱評(四六―

四七頁)

木耳、東村、似六郎、木耳、湖影、空々、ゆたか、紫清、風香、ゆたか（俳句四等）、唯想、知足、紫清（同三等）、風香、松若（同二等）、若翁（同一等）、小波（巖谷小波）（軸）、巖谷小波評（四八頁）

大川二葉、青柳石上、芹菜泡、麓山人、三枝庵鳩丸、永山源治、四季庵、二一転作、柿本へた丸、面堂（狂歌四等）、糸仙子、三枝庵鳩丸、麓山人（同三等）、花笠似六郎、木地楼（同二等）、石原、山（同一等）、撫泉（黒田撫泉）（軸）、撫泉（黒田撫泉）「と、と、と、と」（四九―五〇頁）

劍珍坊（川柳一等）、牧庵、た、を（同一等）、喜藤齋、秋思、柳六坊（同三等）、桜乱坊、佳寿美、弥太坊、碧浪、東籬、自然、あづさ、麓山人、宿六、月形（同四等）、劍花坊（井上劍花坊）（拙吟）、（それぞれに井上劍花坊の評有）（五一―五二頁）

とく子、雨之舎花衣、苦楽亭迷内、森和質人、久世東籬、喜藤齋、赤大夫、飯塚可笑、杉葉又六、深川寶船（情歌十客）、金の家山吹、多久庵、逸見玉の家（同三等）、咲乱坊、樋口扇可（同一等）、深川寶船（同一等）、思案外史（石橋思案）（軸）、石橋思案評（五三―五四頁）

外山治（新体詩一等）、金泥子、白蹄子（同一等）、井川松琴、

長谷川春草、山田素秋（同三等）、河井醉茗「三越の詩趣（応募の詩に就いて）」

【第六卷第二号（明治四一年二月一日発行）】

霞亭（渡辺霞亭）「求婚広告」（六―一四頁）

小野秀「渡良瀬少年」（小説二等）（二一―三〇頁）

清水如春 喜劇「借り衣」（脚本式等）、伊原青々園評（三一―四〇頁）

六花、唯想、可成、楓溪、可成、赤大夫、翠軒、空々、翠溪、湖影、風香、吐香、断腸花、梧堂、紫清（三句）、唯想、琴雨、湖影（俳句懸賞当選外秀逸）（四〇頁）

榎岡金砂「白八丈」（落語二等）（四一―四四頁）

なんこ、皆夢、のぶ子、碧浪、もみぢ、勝船堂、喜藤齋、けん坊、海男、峰坊、竺天坊、鶴々庵、佳寿美、きみ子、冷坊、柳糸、姫小松、法壽子、夢中、花和尚、井蛙人、龍子、秋思、混沌子、長谷坊、菊子、対然坊、からす、晚英、赤大夫、寶船、秋水、花卉、稲友、碧翠、二葉、登茂夫、柳花坊、弥太坊、霞舟、宿六、甘泉、可笑、東村、鱸浦（川柳懸賞当選外秀逸）（四四頁）

青子揚「賓の山」、笹井きみ子「女」、小島流水「天下の粹」、斎藤信義「地方係」、あづさ「是なる哉」、川原松声「初夢」、

淡星生「三越の別嬪」、董女「売場の兄さん」、中村芙蓉「駿河町の春」、とノ字「新調の態度」(小品文四等)、武田鶯塘評(四五―四八頁)

塙呉内、金丸、石原、山、加藤琴雨、清水鶴洲、やなぎ丸、小林東村(はうた四等)

村沢紀度、笹井きみ子、秋月皎天、永田鷗涯、加藤琴雨、堀井蝶々丸、百蛙軒(新体詩四等)(五一―五二頁)

【第十六卷第三号(明治四十一年三月一日発行)】

けい「櫛戸越」(小説三等)(二五―三四頁)

ふたつのいと(山崎紫紅)「支度料」(脚本三等)(三五―四七頁)

山田春桃生「羽衣」(落語三等)、岡鬼太郎評(四八―五三頁)  
稲波、紅の家おいろ、黙雅山人(はうた四等)(五四頁)

左近子、竹山永習(新体詩四等)(五五頁)

几太郎「妥協」、花笠似六郎 無題、静のその守 無題、山田甘泉 無題、珠泉「三越」、杉山帆影「家根の上」、孤舟 無題、

運哉 無題、小島流水「わたくしの娘」、小田すみ「奮発心」、紫緑「三越の松の内」、結城三郎「三越」(小品文四等)(五六―六〇頁)

足立敬亭「寄祝三越主人」、吉田青雨「題時好」、平松鴻城「寄

三越呉服店」(漢詩懸賞選外秀逸)、(それぞれに大久保湘南の評有)(六一頁上段―六二頁上段)

渡辺戸豊恵子、松井汲古、桑田とく子、小泉紫緑、平野千柳園、柏原美奈子、館野喜多子、久世東籬、緑樹園松齋、比古田土仏、佐藤青蘭、清水如春、つる子、久世昌雄、佐久間白菰、加藤玉山、明山生、増山けい、高宮勉、菊池いく子(和歌懸賞選外秀逸)(六二頁上段―六三頁下段)

西森五友、鞠街子、五十鈴庵神風、三枝庵鳩丸、清水鶴洲、竹筭似六郎、葉海坊きらく、熊坂月形、花笠似六郎、四季庵、三枝庵鳩丸、久世東籬、夢山人、福沢久雄、湯川百戯、安藤深雪、柳東葉、鈴木琴峰、糸仙子、四季庵、鞠街子、柿本へた丸、四季庵、笠井木母、糸仙子(狂歌懸賞選外秀逸)(六三頁下段―六五頁上段)

赤大夫、文造、柳花坊、支水、長谷坊、琵琶子、梅雅、喜藤齋、梅軒、佳寿美、蝶々丸、笠天坊、からす、長田今、可祝、新象子、霞漁郎、加茂登、冷坊、喜藤齋、との字、幽泉、白人、笑楽、楓溪坊、長谷坊、可樂多、左次郎、可笑、柳仏、凡野狸、似六郎、笠天坊、こなみ、きぬた、快泉、花和尚、笑子、般若坊、けん坊、皆夢、春雨、阿閑坊、蛙の子、升尾張、似六郎、皆夢(川柳懸賞選外秀逸)(六五頁上段―六六頁)

【第六卷第四号（明治四一年四月二〇日発行）】

山猿「仙女伝」（小説四等）（三七―四四頁）

白雨子「廻り日向」（脚本四等）（四四―四七頁）

冷郎生 新作落語「三越」（落語四等）（四七―五一頁）

【第六卷第五号（明治四一年五月二五日発行）】

銭屋三平「雁の声」（小説四等）（一七―二〇頁）

稲波生 喜劇「顔敵」（脚本四等）（二二―二七頁）

可舟「七五三」（落語四等）、岡鬼太郎評（二八―三二頁）

○「みつこしタイムス」

【第一号（明治四一年六月一日発行）】

遅塚麗水「当用日記」（一）（五頁第一段―第三段）

河井醉茗「柔かき波」（五頁第六段）

【第二号（明治四一年六月一〇日発行）】

遅塚麗水「当用日記」（二）（五頁第一段―第六段）

【第三号（明治四一年六月二〇日発行）】

遅塚麗水「当用日記」（三）（五頁第一段―第六段）

【第四号（明治四一年七月一日発行）】

遅塚麗水「当用日記」（四）（一―一頁一段―二―二頁四段）

【第五号（明治四一年七月一〇日発行）】

遅塚麗水「当用日記」（五）（一―一頁四段―一四頁一段）

【第六号（明治四一年七月二〇日発行）】

遅塚麗水「当用日記」（六）（一―一頁一段―二―二頁一段）

○「三越」

【第一卷第一号（明治四四年三月一日発行）】

森鷗外「さへづり（対話）」（一―八頁）

小金井きみ子「旅婦、末子の病、骨牌会」（九―一六頁）

洪柿の翁（塚原洪柿園）「幕末の江戸風俗（脇差）」（講演）（一―

七―二三頁）

与謝野晶子「呂公の手紙」（二四―二九頁）

駿河町人（松居松葉）「山の鐘」（三〇―三五頁）

【第一卷第二号（明治四四年四月一日発行）】

森しげ女「チチエロオネ」（一―七頁）

長谷川時雨「錦木」（九―一六頁）

国木田治子「嬉涙」（二七―二八頁）

【第一卷第三号（明治四四年五月一日発行）】

洪柿の翁（塚原洪柿園）「幕末の江戸風俗（刀剣の附属品）」

（講演）（一―四頁）

斎藤隆三「日本橋と三越（東都の二名物）」（五―六頁）

洪柿の翁（塚原洪柿園）談「昔しの日本橋」（七〜八頁）

【第一卷第四号（明治四四年六月一日発行）】

岡田八千代「お島」（一〜二頁）

花圃「蜜月の振袖」（二二〜一五頁）

【第一卷第五号（明治四四年七月一日発行）】

森鷗外「流行」（一〜八頁）

高島平三郎「旅行感想」（九〜一二頁）

武田真一「出雲紀行」（一三〜二五頁）

駿河町人（松居松葉）「三溪雨記」（二七〜三六頁）

【第一卷第六号（明治四四年八月一日発行）】

森しげ女「岸」（一〜七頁）

八木契三郎「飛白織の本源地」（八〜一一頁）

駿河町人（松居松葉）脚本「秀吉と淀君」（二二〜二〇頁）

【第一卷第八号（明治四四年九月一日発行）】

小山内薫「帰り道」（一〜八頁）

坪井正五郎「海と人の關係を示す児童用絵本について」（九〜

一三頁）

駿河町人（松居松葉）「哲学劇「人間以上」の転作について、

「人間以上」（序幕）（二四〜二二頁）

【第一卷第九号（明治四四年一〇月一日発行）】

泉鏡花「貴婦人」（一〜二二頁）

与謝野晶子「源氏玉かつら」（二三〜二九頁）

駿河町人（松居松葉）「人間以上」（序幕）（二）（三〇〜三六

頁）

【第一卷第十号（明治四四年十一月一日発行）】

幸田露伴「紋の事」（講演）（一〜二二頁）

井上通泰「浪人大原左金吾の話」（講演）（二三〜三三頁）

報知新聞婦人記者「米国婦人と三越呉服店」（三三〜二七頁）

坪井正五郎「西欧の海上より」（二八〜三〇頁）

【第一卷第一号（明治四五年一月一日発行）】

長谷川時雨「絵巻きの蠹み」（一〜一三頁）

川口陟「雪降る一夜」（一四〜二二頁）

神崎恒子「プリマ、ドンナ」（二二〜二八頁）

松居駿河町人（松居松葉）訳「喜劇「沙翁」（二九〜三六頁）

【第一卷第二号（明治四五年二月一日発行）】

田村とし子「上方役者」（一〜七頁）

坪井正五郎「世界の名物」（八〜一〇頁）

駿河町人（松居松葉）「森本九右衛門翁が伝」（一一〜一四頁）

【第一卷第四号（明治四五年四月一日発行）】

小金井喜美子「紅人友染」（一〜六頁）

【第二卷第五号（明治四五年五月一日発行）】

駿河町人（松居松葉）訳「女五題（二十世紀婦人の告白、煙草を吸ふ女のために、男と女と、近代的諷刺、水曜日）」（一―六頁）

斎藤隆三「春草追悼展覽会の寄贈画を三越に托するについて」

（七―一〇頁）

黒田清輝「杉浦君の表紙画」（一一―一三頁）

【第二卷第六号（明治四五年六月一日発行）】

佐佐木信綱「女十五首」（一頁）

塚原洪柿園「水梅石の来歴」（二―五頁）

坪井正五郎「海外旅行みやげ」（講演）（六―一八頁）

【第二卷第七号（明治四五年七月一日発行）】

駿河町人（松居松葉）画報「玉川の雨」（一―九頁）

松居松葉「英国の大劇評家」（一〇―一七頁）

【第二卷第八号（大正元年八月一日発行）】

洪柿園（塚原洪柿園）「彫像」（一―一二頁）

【第二卷第十号（大正元年九月一日発行）】

森鷗外「田楽豆腐」（一―八頁）

駿河町人（松居松葉）喜劇「別れ話」（九―一二頁）

【第二卷第十一号（大正元年一〇月一日発行）】

森しげ女「お鯉さん」（一―五頁）

駿河町人（松居松葉）訳喜劇「該撤が妻」（六―一二頁）

【第二卷第十二号（大正元年十一月一日発行）】

佐々政一「武士道以前の日本趣味」（講演）（一―一七頁）

半井桃水「故一葉女史に就て」（講演）（一八―二三頁）

新渡戸稲造「外遊所見流行談」（講演）（二四―三七頁）

泉谷氏一「独逸新流行の写真」（三八―四八頁）

【第二卷第十三号（大正元年十二月一日発行）】

長谷川時雨「歌念仏」（一―一七頁）

沼波瓊音「意匠ひろひ」（一八―二八頁）

駿河町人（松居松葉）「十一月十五日之夜」（二九―四四頁）

【第三卷第一号（大正二年一月一日発行）】

洪柿翁（塚原洪柿園）「屏風の画」（一―一三頁）

宮川スミ子「子女教育上父母の注意すべき事項」（講演）（一四―二七頁）

（二七頁）

坪井正五郎「諸人種の親子」（講演）（二八―三七頁）

菅原教造「募集図案の審査法に就て」（三八―五七頁）

【第三卷第二号（大正二年二月一日発行）】

饗庭篁村「餘寒」（一―一〇頁）

カムベル、マグワイー 黒田撫泉訳「白鳥物語」（一一―一三

頁)

【第三卷第五号(大正二年五月一日発行)】

佐々醒雪(佐々政一)「西鶴に頭はれし物価」ことに衣類の価値

〈講演〉(一〜九頁)

井上剣花坊「古川柳より見たる江戸の花見」〈講演〉(二〇〜二

四頁)

【第三卷第六号(大正二年六月一日発行)】

岡田八千代「名残の一曲」(一〜二頁)

【第三卷第七号(大正二年七月一日発行)】

佐々木信綱「若葉の露」(一頁)

長谷川時雨「浦のけむり」(二〜二二頁)

【第三卷第十号(大正二年一〇月一日発行)】

森鷗外「女がた」(一〜二三頁)

【第三卷第十一号(大正二年十一月一日発行)】

斎藤隆三「江戸時代の模様物に就いて」〈講演〉(一〜一四頁)

松居松葉「西洋の芝居」〈講演〉(一五〜二六頁)

竹の屋主人(饗庭篁村)「手拭合」(二七〜二八頁)

井上剣花坊「江戸趣味と十月の三越」(二九〜三三頁)

【第四卷第一号(大正三年一月一日発行)】

巖谷小波「満鮮の小国民」〈講演〉(一〜三三頁)

【第四卷第二号(大正三年二月一日発行)】

石井祈山「洋服」〈文芸の三越第二等落語〉(一〜七頁)

柳美登里「三越」〈文芸の三越第二等長唄〉(八頁)

柳作楽「吉例春三越」〈文芸の三越第三等長唄〉(八〜九頁)

田畑千壺「曠小袖」〈文芸の三越第三等清元〉(九〜一〇頁)

松長草の家「三越」〈文芸の三越第三等長唄〉(一〇頁)

【第四卷第三号(大正三年三月一日発行)】

妹尾八重子「婚礼の曲」〈文芸の三越第二等小説〉(一〜二〇

頁)

【第四卷第四号(大正三年四月一日発行)】

額田六福「呉服祭」〈文芸の三越当選お伽脚本〉(一〜一六頁)

【第四卷第五号(大正三年五月一日発行)】

久保田米益「三三日記」(一〜一四頁)

【第四卷第六号(大正三年六月一日発行)】

岡本綺堂「脚本」奥州の義経」(一〜一八頁)

【第四卷第七号(大正三年七月一日発行)】

小山内薫「帯」(一〜四頁)

巖谷小波「趣味の徳」〈講演〉(五〜一〇頁)

【第四卷第八号(大正三年八月一日発行)】

菊池寛一郎(菊地寛)「流行の将来」〈文芸の三越第二等論文

(一〇八頁)

松山憲子「初上り」(文芸の三越第二等写生文)(八〇一六頁)

【第五卷第一号(大正四年一月一日発行)】

巖谷小波 お伽芝居「曾呂利舞」(一〇七頁)

【第五卷第三号(大正四年三月一日発行)】

遅塚麗水「曲阜と泰山」(講演)(一一四頁)

【第十四卷第一号(大正三年二月一日発行)】

加賀甫 童話「仏様と子燕」

【第十四卷第十号(大正三年二月一日発行)】

浜田広介 童話「森の王子」(二五〇二七頁)

【第十五卷第一号(大正一四年一月一日発行)】

森晁紅 三越笑話「横丁の富士」(一一一三頁)

【第十五卷第二号(大正一四年二月一日発行)】

花崖 田園小品「牝鶏」(一三〇一五頁)

岡本綺堂「鐘ヶ淵」(一)(一六〇一九頁)

与謝野晶子「春興」(一九頁)

【第十五卷第三号(大正一四年三月一日発行)】

赤松月船「子供の詩」(一三頁)

岡本綺堂「鐘ヶ淵」(2)(二〇〇一三頁)

正富汪洋「若盛り」(二三頁)

【第十五卷第四号(大正一四年四月一日発行)】

伊原青々園 演劇挿話「路考と仙魚」(八〇一〇頁)

岡本綺堂「鐘ヶ淵」(3)(一九〇二二頁)

クロイノフ 中村白葉訳「獅子の養育」(二六〇二七頁)

【第十五卷第五号(大正一四年五月一日発行)】

原阿佐緒「海の春」「山の春」(二二頁)

伊福部隆輝「若葉の影にて」(九頁)

【第十五卷第六号(大正一四年六月一日発行)】

中西悟堂「華やかに」

杉浦翠子「山莊の歌」(一六頁)

【第十五卷第七号(大正一四年七月一日発行)】

橋田東声「鳩の浮巢」(一五頁)

【第十五卷第八号(大正一四年八月一日発行)】

稲垣足穂「オルベア広場の月」(二〇一五頁)

【第十五卷第九号(大正一四年九月一日発行)】

正富汪洋「朝月」(五頁)

正木不如丘「紫」(六〇八頁)

【第十五卷第十号(大正一四年一〇月一日発行)】

石原純「五位鷲がなく」(一五頁)

【第十五卷第十二号(大正一四年十二月一日発行)】



橋田東声 「野分して」(九頁)

【第十六卷第一号(大正一五年一月一日発行)】

赤松月船 「いつもの謎」(一〇頁)

【第十六卷第二号(大正一五年二月一日発行)】

生田蝶介 「熱帯梅園の歌」(一三頁)

【第十六卷第三号(大正一五年三月一日発行)】

深山小一郎 「花咲く日」(一四頁)

【第十六卷第四号(大正一五年四月一日発行)】

小野政方 「朝のお日様と子ども」(六〇九頁)

【第十六卷第五号(大正一五年五月一日発行)】

鈴木澄 童話「蝶々の香水屋さん」(二一五頁)

【第十六卷第六号(大正一五年六月一日発行)】

中川秀雄 「みいちゃんとかナリヤ(童話)」(二二一三頁)

伊福部隆輝 「或る日の招待状」「Kさん」「ビールの佳き頃」

(一八頁)

【第十六卷第七号(大正一五年七月一日発行)】

塚原健二郎 「九官鳥とくづや(童話)」(二三一四頁)

【第十六卷第九号(大正一五年九月一日発行)】

井東憲 「楽しき園へ(童話)」(一三一四頁)

【第十六卷第十一号(大正一五年十一月一日発行)】

菅原寛 童話「枯葉の嘆き」(二五頁)

花田徹太郎 「蟹とラヂオ(童話)」(一八一九頁)

【第十六卷第十二号(大正一五年十二月一日発行)】

野口雨情 「サンタクロスの小父さん」(二三四頁)

高山輝雄 「ヤマガラと子猫(童話)」(二二二三頁)

【第十七卷第一号(昭和二年一月一日発行)】

松沢雪松 「初風ぎ」(二頁)

加宮貴一 「雪やこんこん(童話)」(二二三頁)

【第十七卷第二号(昭和二年二月一日発行)】

小野金次郎 「羽子板病院」(一三一四頁)

【第十七卷第四号(昭和二年四月一日発行)】

中原綾子 「明暗」(一二頁)

井東憲 童話「山雀のお爺さん」(一三一四頁)

【第十七卷第六号(昭和二年五月一日発行)】

鷹野つぎ 「チロよ(童話)」(一五頁)

【第十七卷第八号(昭和二年七月一日発行)】

大関五郎 「可愛嫁さま」(六頁)

松川みどり 「夏は楽し」(一三頁)

【第十七卷第九号(昭和二年八月一日発行)】

森曉紅 清元新曲「千代繁昌皆三越」(七頁)

【第十七卷第十号（昭和二年九月一日発行）】

中河幹子「軽井沢起居」（七頁）

角田竹夫「客間」（一二頁）

吉田金重「二休と義満公」（一八―一九頁）

【第十七卷第十三号（昭和二年十二月一日発行）】

大平野紅 童話「月姫星姫」（二八―二九頁）

【第十八卷第五号（昭和三年五月一日発行）】

グッドランダー 横本楠郎訳「正直な樵夫（童話劇）」（二二―

二二頁）

【第十八卷第六号（昭和三年六月一日発行）】

小野政方 童話「お母様の魂」（一九―二〇頁）

【第十八卷第八号（昭和三年八月一日発行）】

石黒露雄「けちんぼルシイ（童話）」（二四―二五頁）

【第十八卷第十号（昭和三年一〇月一日発行）】

並木秋人「山雲集」（六頁）

松村又一「野火（童話）」（九頁）

広瀬操吉「鸚鵡を貰った百姓（童話）」（三二―三三頁）

【第十八卷第十二号（昭和三年十二月一日発行）】

鳥影盟「日美子の昇天」（一五―一七頁）

【第十九卷第一号（昭和四年一月一日発行）】

グッドランダー 横本楠郎訳 童話歌劇「小松の望み」（二四―二六頁）

一龍齋貞山「秀吉の婚礼」（一八―二〇頁）

【第十九卷第二号（昭和四年二月一日発行）】

西谷勢之介 童話「猿まはし」（一五頁）

【第十九卷第三号（昭和四年三月一日発行）】

エス・ストー「卓に対して」

金子薫園「春の光」（一〇頁）

小野金次郎「嘉平次の買物（童話）」（一九―二〇頁）

【第十九卷第四号（昭和四年四月一日発行）】

大関五郎「春」（一九頁）

石黒露雄「おとなり」（二二頁）

【第十九卷第五号（昭和四年五月一日発行）】

内藤千乃「名妓物語」（二三―）

【第十九卷第六号（昭和四年六月一日発行）】

今井邦子「新しき洋傘―初夏雑水―」（七頁）

石原亮「海」（二三頁）

【第十九卷第八号（昭和四年八月一日発行）】

飯田豊二「蛇の失敗（童話）」（二八―二九頁）

【第十九卷第九号（昭和四年九月一日発行）】

広瀬操吉「太陽の娘」

をの・まさかた「睡蓮の花(童話)」(二四―二五頁)

【第十九卷第十号(昭和四年一〇月一日発行)】

石原亮「スタンド」(一七頁)

松村又一「山の音(民謡)」、西谷勢之介「お月様(童謡)」(一五頁)

並木秋人「秋日展望」、中河幹子「海浜と愛児」、神尾光子「三

越礼讚」(二四頁)

石黒露雄「童話「釣られた鮒」(二七―二八頁)

【第十九卷第十一号(昭和四年十一月一日発行)】

村岡花子「しゃっくり青助(童話)」(三〇頁)

【第二十卷第二号(昭和五年二月一日発行)】

藤田健次「鳩の唄」、西谷勢之介「蟹の子」(一九頁)

【第二十卷第五号(昭和五年五月一日発行)】

並木秋人「晩春初夏」(二二頁)

【第二十卷第六号(昭和五年六月一日発行)】

藤田健次「下田小唄」(一七頁)

多喜坊「三越行進曲」、大関五郎「ところは東京日本橋」(一八頁)

山本敏樹「夏日抄」(二四頁)

神尾光子「浴衣」(三〇頁)

【第二十卷第七号(昭和五年七月一日発行)】

角田竹夫「夏の朝」(二六頁)

【第二十卷第九号(昭和五年九月一日発行)】

伊福部隆輝「童話「月の中の蛙」(二八頁)

【第二十一卷第一号(昭和六年一月一日発行)】

大関五郎「春は武蔵の日本橋」、塚本篤夫「池の鯉」(二二頁)

【第二十一卷第五号(昭和六年五月一日発行)】

小林林之助「白い鸚鵡」(三六―三七頁)

石黒露雄「自動車ポンプ」(三六頁)

山本敏樹「初夏(和歌)」(三七頁)

【第二十一卷第六号(昭和六年六月一日発行)】

大関五郎「そよ風吹きや」、松村又一「浮雲」、塚本篤夫「思ひ出」、藤田健次「おほこおほこでも」(一七頁)

伊福部隆輝「不思議な泉」(三二―三三頁)

神尾光子「早慶競漕の日」(三三頁)

【第二十一卷第七号(昭和六年七月一日発行)】

児玉花外「大三越の歌」(二三―二六頁)

大関五郎「秋の夢」(三四頁)

小野政方「青百合の花」(三六―三七頁)

【第二十一卷第八号（昭和六年八月一日発行）】

児玉花外「大三越の歌」（続）（二六頁、二八頁）

中村正雄「容平と小鳥（童話）」（三〇―三二頁）

【第二十一卷第九号（昭和六年九月一日発行）】

藤崎牧童「木の実の願（童話）」（三九―四〇頁）

【第二十一卷第十号（昭和六年一〇月二日発行）】

入交総一郎「道士と柿の実（童話）」（三九―四〇頁）

【第二十一卷第十一号（昭和六年十一月一日発行）】

並木秋人「信濃の秋」（二二頁）

【第二十二卷第一号（昭和七年一月一日発行）】

千乃女「春がくる（小唄）」（三三頁）

徳永寿美子「鼠のいろはかるた」（三三頁）

【第二十二卷第二号（昭和七年二月一日発行）】

楠郎生（槇本楠郎） 童話「鶴と狐師」（三二―三三頁）

【第二十二卷第三号（昭和七年三月一日発行）】

松村又一 民謡「吾子可愛いや」（二二頁）

【第二十二卷第四号（昭和七年四月一日発行）】

並木秋人 民謡「山の音」、渡辺伍郎 童謡「わたし場」（三六頁）

【第二十二卷第六号（昭和七年六月一日発行）】

山崎定夫「少女の危機」（一）（四〇―四一頁）

【第二十二卷第七号（昭和七年七月一日発行）】

渡辺伍郎「海の実おとし」（二八頁）

山崎定夫「少女の危機」（二）（三八―三九頁）

【第二十二卷第八号（昭和七年八月一日発行）】

児玉花外「美の海山」（一九頁）

森曉紅「弥次喜多模様」（一）（四〇―四二頁）

山崎定夫「少女の危機」（三）（四四―四五頁）

【第二十二卷第九号（昭和七年九月一日発行）】

森曉紅 現代風俗「弥次喜多模様」（二）（四〇―四二頁）

石原亮「兎」、「鴉」（四二頁）

山崎定夫「少女の危機」（四）（四五―四六頁）

【第二十二卷第十号（昭和七年一〇月二日発行）】

森曉紅 現代風俗「弥次喜多模様」（三）（三七―三九頁）

山崎定夫「少女の危機」（五）（四二―四三頁）

【第二十二卷第十一号（昭和七年十一月一日発行）】

森曉紅 現代風俗「弥次喜多模様」（四）（三六―三八頁）

石原亮「栗としやつぼ」、「生卵の勝利」（三八頁）

舟木瀧夫 少年物語「川の上下」（四〇―四一頁）

石原亮「小羊の子供」、「小鳥のかくれんぼ」、「雪のちこそう」  
(二〇頁)

【第二十三巻第二号(昭和八年四月一日発行)】

石原亮「置時計」(一〇頁)

北川田鶴子「童話」「軽気球が話しました」(四〇頁)

石原亮「虹」(四二頁)

○『文芸の三越』(大正三年一月一〇日発行)

緒言(一一―一八頁)

松村みね子「赤い花」(小説第一等)(一―三四頁)

池田永治「美しき鼓手」(写生画第一等)(一九頁に挿入)

田頭島影「二十年」(喜劇脚本第一等)(三五―八二頁)

日高島助「駿河町ノ朝」(写生画第二等)(五七頁に挿入)

手塚小南「流行の将来」(論文第一等)(八三―一〇二頁)

小林六之助「雨の三越前」(写生画第二等)(九三頁に挿入)

横山匂ひ草「子供になる記」(写生文第一等)(一〇三―一一四頁)

頁)

中西立頃「案内のボーイ」(写生画第三等)(一〇九頁に挿入)

杜口なきさ(森口多里)「囚はれ乙女」(お伽脚本第一等)(一

一五―一五〇頁)

小笠原悟「三越食堂にて」(写生画第三等)(一三二頁に挿入)

足立狭花「三人姫」(お伽話第一等)(一五一―一七一頁)

中村梅吉「無題」(写生画第三等)(一六三頁に挿入)

中村三郎「時雨装束」(狂言第一等)(一七二―一八六頁)

田崎庸三郎「僻村の茶屋にて」(写生画第三等)(一七九頁に挿

入)

若松操「常磐津」「小袖妻」(長唄、常磐津、清元)(一八七―二

〇〇頁)

横田小寿栄「三越の歌」(唱歌第一等)、妹尾さくら戸「三越の

歌」(同第二等)(二〇一―二〇六頁)

鈴木蘭蝶史「女帯」(落語第一等)(二〇七―二一八頁)

菅莊男「巨人の骨組み」(写生画第三等)(二二二頁に挿入)

花色(一口噺第一等)、網野恭助、岡林松風(同第二等)、岡崎

看山、久松一、小峰秀耳、吉田芳、坂井田稻四郎(同第三等)、

木谷龜太郎、田中重介、古谷はま女、山田勝二郎、古谷はま女、

川村丑之助、吉田芳、郡場徹、館野功、麻生路郎(同第四等)

(二一九―二四四頁)

野村波の家(端唄第一等)、大浦静波、田畑千壺(同第一等)、

田畑竹女、誠山、白百合(同第三等)、菅野吟平、平六園、鈴

木虎雄、無所頼庵、たぬき亭化人(同第四等)、桃水(半井桃

水)、蝶二(中内蝶二)(二三五―三九頁)

正木ふち(和歌第一等)、宮崎九成、篠田武男(同第二等)、平松優、鈴木善之助、横山笑月、小峰源太郎、花園さゆり(同第三等)、伊藤益子、任君子、栄谷晚鐘、宮地月子、辻荻弓、栄谷晚鐘、竹内好直、新井淳一、佐伯つきの、木暮厚平(同第四等)(二三〇―三三三頁)

荒川小虹子(俳句第一等)、荒木緑丸、山崎喝破(同第二等)、浅香東明子、楡木正雄、永瀬つる子、松本秋丸、睡蓮洞(同第三等)、浜田博稔、加藤緑峰、丹野梅甫、三浦白楡生、小久里湖月、小林珂堂、西田二郎、久河古扇、花笠似六郎、野田峰治(同第四等)(二三四―三六頁)

吉川独活居(吉川英治)(川柳第一等)、平瀬葛雄、染野猪牙坊(同第二等)、森井深編笠、松橋柳影子、吉川白峰、左瀬雲雨閣、横川丸人(同第三等)、三茶子、伊沢久蔵、加藤かもめ、渡辺黒翁、山本法外、正岡仏手柑、高瀬六蛙仏、花又花酔、藤波楽斎、吉井錦水(同第四等)、剣花坊(井上剣花坊)(二三七―三九頁)

岡野霞村「春着」(狂詩第一等)、中島玩球「桜看板」、館義卿「江戸振」(同第二等)、花笠似六郎「貴賓室」、西村兼「金字三越」、大矢湘陰「売場花」、小島紫楼「兜巾帽」、工藤狂詩堂

「地方係」(同第三等)、堀越逸多郎「江戸昔」、沖荆山「推三越」、閑々字人「機嫌直」、梅本嗜餅翁「觀光団」、塩見柴子「五階高閣」、松田鳳声「嫁人」、市川悟翁「赤毛布」、白木無韻「和合元」、吉田青々「春色盈」、佐藤三益「七五三」(同第四等)(二四〇―二四六頁)

小林里子(狂歌第一等)、久世東離、田中初心(同第二等)、玉又舎南海、梅李園、市舎悟入、吉田案山子、宮川よし女(同第三等)、素朴、内田貞二郎、小栗涸川、川辺山人、平尾東洋、春巷、花笠似六郎、八松軒、茶畑山人、酒の家徳利(同第四等)(二四七―二五〇頁)

伽羅蔵(情歌第一等)、千二坊、松亭(同第二等)、閑八重梅、闇五郎、君影草、波の家、因坊(同第三等)、山田金章、葛野もん子、北城庵香風、富坂美風、可笑、ウツチ亭、楓亭金水、新井藻屑、凡亭、閑々舎(同第四等)(二五一―二五四頁)